

技術の発展と人間

—フ リー ド マ ンの 社 会 学—

小 関 藤 一 郎

I

1971年11月、フランスの文化使節として日本を訪問したフリードマン G. Friedmann は、「人間は果して技術の進歩を真に人間の均衡と幸福の根源的要求のために利用できるであろうか」という問題の解決にせまられている点で、日本も欧米の先進産業社会の例外をなすものではない、という感想をのべている¹⁾。

実際、20世紀後半になってからの技術の発達はいわゆる著しいものがある。それは先進工業国にかかってない高度の経済成長をもたらし、またそれに伴って人々の生活水準を著しく向上せしめた。しかし、こうした利点の反面、技術の進歩は自然破壊、環境汚染をはじめ、労働の過度の細分化、職業病、精神的障害、いわゆる労働疎外とよばれる現象をおこす非人間的労働条件など、今までになかった多くの問題を惹起せしめてきている。そしてわが国においても、最近こうした問題がとくに人々に注視されるようになってきた。それだけでなく、さらに、技術の進歩と人間の幸福をどのように調和させるか、についての適切な対策の樹立が急を要する課題となってきた。G. フリードマンはこの問題について1926年 Ecole Normale Supérieure 卒業以来50年近くにわたって、技術の人間の感性や心性に及ぼす影響について研究、調査を行ってきており、それらについて夥しい著作・論文を発表してきている。フリードマンは1972年日本流に言えば古稀を迎えたのであるが、今なお元気に活躍しているが、1972年にフリ

ードマンに直接、間接教えをうけた人々や彼と協力してきた学者たちは「新しい文明？」 Une nouvelle civilisation ? と題する記念論文集を刊行、フリードマンに捧げている。この論文執筆者にはトゥレーヌ、デュマズディエ、モラン、レイノオ、ドラモットなど現代フランス社会学、とくにその産業・労働部門で活躍している学者20人以上が含まれている。筆者も1964—65年在仏中、フリードマンの講義に出席したことがあり、また1971年来日の際、各地での講演の通訳をつとめたり、彼の名著“Travail en miettes”の翻訳をした関係もあるので、ここにフリードマンの考え方を全面的に検討し、彼の考え方の今日的意義を明らかにしたいと考える。なお、フリードマンは現在でも Directeur d' Etudes à l' Ecole Pratique des Hautes Etudes であり、この機関に所属する Centre d'Etudes Transdisciplinaires, Sociologie, Anthropologie, Sémiologie²⁾の所長をつとめている。

II

フリードマンは1902年パリに生れ、Ecole Normale Supérieure で学んだ(1923—26)が、agrégé を得たのち、1931年から技術の現代人の精神生活に対する増大する影響についてとくに研究をはじめ、実地の経験をつむため1932—33年機械修理工 mécaniqueien としてパリにあるディドロ職業学校 Ecole Professionnelle Diderot で見習訓練を受けた³⁾。フリードマンは訪日期間中、ブーグレ教授の助手であった間、機械の実習に従事した

1) フリードマン、「細分化された労働」、日本語版への序言 p. v.

2) この研究所は最近(1974年)までは Centre d'Etudes des Communication de Masse とよばれていて、機関誌 Communications を発刊行しているが、機関誌名はそのまま踏襲されている。

3) Biographie de Georges Friedmann in “Une civilization nouvelle.”?, 1972, p.475—476.

とのべていたが、それはこのことをさしているように思われる。それからフランス、イギリス、チェコスロヴァキア、ポーランドなど各国の工場を視察し、数多くの調査を行ったり、労働の変化を実地に視てまわったのであるが、ロシア語を学びソ連にも長い期間滞在して現地で工場における社会主義経営を視察している。第二次大戦には将校として召集されたが、休戦後は抵抗運動に参加した。1946年以降国立工芸大学 Conservatoire National des Arts et Métiers の教授となり、労働史の講座を担当した(1960年まで)。1947年には工業機械化時代の人間問題 Problèmes humains du machinisme industriel を刊行したがこれは博士論文として提出されたものである。これ以降、産業労働に関する著作をつぎつぎと刊行しているが、末尾にその主要なものだけを掲げた。雑誌論文などは省略した。これについては、上記「新しい文明」末尾参照。なお以下引用する彼の著作については末尾に記した番号によって示すことにする。

以上略述した彼の略歴⁴⁾からもわかるように、フリードマンは社会学的考察を労働・産業の問題に適用した創始者であり、現在フランスでこの領域を活躍している社会学者は多かれ少なかれ彼の影響をうけていたといえるのである。そしてまた、フリードマンはフランスにおける産業社会学の創設者であるといわれるが、これも、アメリカの援助でヨーロッパ生産性本部がパリに設立され、フランスの産業における生産性向上をめざす運動が開始され、これに伴ってフランスの企業体質の改善が問題にされたとき、フリードマンがそれまでにこの領域で行ってきた研究の実績が社会学的考察を進めるのに大いに役立ったからなのである。

フリードマンの考察、研究の中心的な主題は技

術と人間の問題であって、彼はとくに産業社会学の体系化や方法論について特に多く論じているのではないが、最初にその産業社会学論からみていくことにしよう。

産業社会学という名称について、フランス語では英語の Industrial Sociology に対してその直接の対置物にあたる Sociologie industrielle が用いられることもある³⁾。しかしこれよりは Sociologie du Travail が用いられる方が一般的で、Année Sociologique などでもこの名称が用いられているし、雑誌でも同様 “Sociologie du Travail” という誌名のものがあるし、ロル (Pierre Rolle) の包括的な著作も Introduction à la sociologie du travail⁴⁾ という題名が用いられている。これについてフリードマンは、(10) の中で産業社会学が本来扱っている問題は、たんに工業的企業における問題ばかりでなく、商業、官庁、病院等あらゆる人間の労働集団における問題にも及んでおり、また、Industrie という語はフランス語ではとくに工業を意味するために用いられるから、その意味でも Sociologie industrielle よりは Sociologie du travail の方が適切であるという⁷⁾。

こうした人間の労働集団というのは、フリードマンによると、生産技術のたえざる進歩、量、質両面における企業数の著しい増大、組合的結社の増大、テーラー主義にともなう科学的労働組織体系の重要性増大によって、社会学者がは、労働活動を機会に人間が結成する種々の集団に注意を向けるようになった集団のことで、それは企業も大型客船も各種の規模の農業集団も大百貨店も鉄道従業員も各種の規模の農業集団も大百貨店も鉄道従業員の集合も県庁などをも含んでいるのである。⁸⁾ それは人間関係 Human Relations といわれるものと同じではないし、また Industrial Relations

4) 工芸大学教授以外の経歴は次のとおりである。1948年以降 Directeur d'Etudes à l'Ecole Pratique des Hautes Etudes (今日まで) 1949—62, Professeur à l'Institut d'études politiques, 1949—51, Directeur du Centre Sociologique, 1956—1959, Président de l'Association internationale de sociologie, 1958—1964, Président de la Faculté latino-américaine des sciences sociales, なお1957, 1958, 1960に何度もラテンアメリカ訪問1960年以降は l'Ecole Pratique des Hautes Etudes 教授に専念。そこに Centre d'études des communications en masse を設立。なおこのほか Friedmann が編集に関係をしてきた雑誌に Sociologie du Travail (1959年以降) Annales, (Civilizations, Economie et Société) などがあげられる。

5) たとえば (11) では第五部は Industrie industrielle となっている。

6) この書は1971年刊行である。

7) 10) p. 26—27, および “Quelques problèmes de définition et de limites,” Sociologie du Travail n. 1, 1959, p. 1—11.

8) 10) p. 25.

といわれるものと同じではなく、また Industrial Relations よりも広義であるばかりでなく、組織 organisation と異なるのである。人間の労働集団 collectivities humaines de travail と組織の異なる点は、後者はその成員のもつ責任が明確であり、任務が予め調整されている労働集団であるのに対し、労働集団ではその成員の機能は体系的に結びつけられておらず、その活動も予め規定されていない点にある⁹⁾。だからこうした見方をすると、組合は組織ではなく、労働者の結社であり、政党も包括的見地からみると、組織ではなく、成員のローテーションが急速でかつ予め定められた計画はもたない結社であるということになる。そして一般にはこうした意味で組織ではない労働集団が多いのである。次に組織というとき、その心理的面が強調されていることは、サイモンのいうように、組織の本質的機能の一つは「その全成員を、成員の意志決定を、その目的に適応せしめ、成員が意志決定するのに必要な情報を成員に提供するような、心理的環境の中におくことにある」¹⁰⁾ ことから明白である。つまり、組織においては個人が共同の目的にしたがって具体的な意志決定を行なうのに必要な心理的環境が重視されているのであるが、労働集団では必ずしもそうした面だけが強調されはしないのであり、むしろ、もっと客観的面が重視されるのである。人間関係論の見方がこの組織を社会心理学的角度からみる接近法であることは周知のとおりであるから、それと労働集団の差異については改めてここで詳述する必要もないであろう。労働集団についての社会学としてみられる産業社会学は、成員の態度や彼等のおかれている労働状況を、包括的社会 sociétés globales 経済体制、文化的規範との関係において考察するものであるから、アメリカの産業社会学が重視した社会心理的側面は相対的なものであることを明かにするものなのである。

ところで、こうした産業社会学は、その構想から Human Relations を中心としたものと異なることは明白であるが、どのような構成をもつのであ

うか、次にそれを見ていくことにする。フリードマンは「人間的要因、とくにその新しい一面である社会的要因を考慮することの必要性が明らかになったのは、技術的合理化の相対的失敗に由るものである」とみる。産業社会学はこの、社会的要因を実際に研究し、その適用を行なうという意図から生じたものであるが、その研究の特性上、その枠は拡大せざるを得なくなった。そして同時に産業社会学は、その研究の段階ごとに、その社会的役割という問題に直面するようになり、直接的応用への志向をやめることになる。他方また、産業社会学は生産技術が発達するのに伴って、それが職業の発展にどのように作用するかという問題にも関心をもたなければならなくなるとともに、企業とその内面的生活ばかりでなく、産業社会 société industrielle 全体を対象として考察するようになる¹¹⁾ とのべているが、彼の構想によると、産業社会学は次の四つの領域にわかれることになる。(11)によると Friedmann は産業社会学を四つの章にわけている。この各章がその領域になるとみることができるのである。その四つとは、(1)生産技術と労働の社会学 (sociologie des techniques de production et du travail), (2)企業の社会心理学, (3)組合運動、労働者の自主管理および労働紛争の社会学 (sociologie du syndicalisme, de l'auto-gestion ouvrière et des conflits du travail), (4)労働生活と労働外の生活、産業と社会 (Vie de travail et vie hors-travail, Industrie et Société) である。そこでこの四つの領域の主要問題を見ていくと次のようである。¹²⁾

(1)は(a)生産技術の発達 i 一般的条件, ii 機械の発達, iii 生産の組織化, (b)労働の変遷, i 技能職から職場へ (du métier au poste de travail), ii 熟練技能の変化, iii 職業構造, (c)職業教育、訓練などの問題を含む。(2)は企業内生活の問題で、i モラル、一企業における社会体系(相互作用の体系)と企業のモラル、ii 個人の動機づけ一職業に対する動機づけ、賃金と動機づけ, iii 作業集団—集団による能率統制、集団意識と生産性、作業

9) (10) p. 31—32.

10) H.A. Simon, *Administrative Behavior* 1948 p. 79, cité par G. Friedmann, (10) p. 32.

11) Friedmann (11), p. 439—440.

12) (11) p. 441—511.

チームの指採, iv 組織の社会心理, 一企業内コミュニケーション, 意志決定権の配分を含む。(3)は(a)組合運動と労働者の活動— i. 企業内の組合, ii. 組合運動と自主管理, iii. 組合運動と包括社会, iv. ストライキの変遷とその解釈, (b)労働者の条件に生じた変化。(4)は(a)労働生活の心理的, 社会的面—就職期と職業選択期, (b)仕事の経歴の類型, (c)安定期と老年期, (d)老令労働者と雇用市場, (e)職業生活の終焉, (f)産業と社会—社会階層や社会移動の問題を扱う—などを含んでいる。このように四つの部門から産業社会学は構成されることになるので, 人間関係だけを中心としたレスリスバーガーなどの産業社会学とは著しく異なることは明白であるが, これだけの問題を概説することはおそらく一人では容易ではないであろう。フリードマンが J.D. レイノオや J.R.G. トレアントンなどと共同で執筆した(10)ではその骨組みだけしか示されていない。これを発展させたのが, ナヴィル Pierre Naville と共同で編さんされた *Traité de Sociologie du Travail* 上下二巻であるが, ここではさらに開発途上国における労働問題までもがとり扱われている。これについてさらに立ちいることは紙数の関係からも, 主題の考察の枠からははずれるので, ここではさけることにする。

産業社会学の領域がこのようなものであるとするならば, フリードマンが特に詳しく扱い論じてきたのはどこになるであろうか。それは彼の主要著作や論文などからみても, このうちの(1)と(4)にわたる部分であるといつてよいであろう。フリードマン自身はその点について明示的な言明を行っていないし, また上述したように全般的に体系的な論述はなされていないが, 彼の学位論文となった(3)から(5), (7), (13), (14)における考察は技術発達の人間の労働におよぼす影響ないし衝撃といった問題である。それは別の言葉でいえば「技術と人間」についての考察ともいえるであろう。そしてそれが彼の考察の中心をなすものであるといえよう。そこで次にこの問題についてふれていくことにしよう。

Ⅲ

フリードマンの技術と人間に関する考察の中でまず第一に注視されなければならないのは, 彼の「自然環境 *milieu naturel* と技術環境 *milieu technique*」の概念の問題である。この主題は(5)の第一章としてかかれた論文の題名ともなっており, それはさらに(13)の最初にもくりかえし論じられている。さて技術的環境とは何であろうか。フリードマンは「産業革命のはじまってから以降—イギリスでは18世紀末, ヨーロッパ大陸では19世紀のはじめ—工業化された社会および共同体において発達してきた環境である。」¹³⁾という。この環境を構成する主要な範疇は, 「工業および農業部門にひろがる生産技術, 管理技術, 分配の技術, 消費の技術 (この中には家庭生活や家事にも変化をおよぼしている各種の技術を含む), 輸送の多様な技術, 連絡と伝達の技術とくに電信, 電話, 無線電信, ラジオ, テレビジョン, および余暇の技術 (この中にはラジオ, 映画が含まれる) などである。この環境は現在その密度が強くなっていて, 人間の周辺に多くの刺激を増大させているが, この刺激は最近の心理学が明かにしてきたところによると, 自然環境によって与えられる刺激とは本質的に異なるものである」¹⁴⁾というのである。この構成部類をみても明かなように, それは生産の機械, 装置あるいはそれに関連する組織機関だけでなく, 各種交通輸送機関, 通信伝達機関, 娯楽施設などすべてのものを含んでいる。そればかりでなく, 交通輸送機関にしても, 通信伝達の機関にしても, 極めて多種多様であり, それらは人間の日常生活のあらゆる領域に浸透しており, しかも人間の生活条件を刻々と変えているのであり, また同時に, 少くとも先進国においては今日の人間生活の運営はそうした技術を利用しないでは不可能となるほどまでになっている。このように人間生活の中に深く浸透し, それを支えている技術の全体が技術環境といわれるものである。著しく発達したマス・メディアがわれわれの生活に無数のこみいった情報網をはりめぐらし, われわれがしらすしらすのうちにそれに反応しなければなら

13) 13) p. 97.

14) *ibid.*, p. 97—98.

ないようになっている状況が準環境とよばれるが、この準環境は技術環境のうちに含まれるばかりではなく、技術環境が問題となるのは、それが人間の生活、心性、感受性などに多くの変化をもたらしているからなのである。たとえば、今日の技術文明の下に生活している人間は、この技術環境によって、距離の観念をすっかりかえてしまっている。各種の交通機関の発達によって、従来辺地と考えられたところも一部の人々にとっては容易に接近可能なところとなっている。もちろんそうしたことが可能となるためには、技術的手段のほかに財政的手段が結びつかなくてはならないだけではなく、そうした遠隔地への移動を日常生活の計画の中において実現しようとする心性 *mentalité* の変化も伴っていなければならないのである。輸送機関のうちでも、とくに航空機の発達はそうした変化をさらに一層著しくしているが、それに伴って全世界的にバスなどの公共的輸送機関や各種の宿泊、観光などの建物、施設も著しく発達しなくてはならないのであり、それが今日の余暇ともきわめて重要な関係をもってくるようになってきている。いずれにせよ、この技術環境は今日では先進工業国だけでなく、全世界的にその枠を拡大していることが注目されなければならない。

ところで、この非常な速力でのびているこの人為的環境とならんで、別の世界—それは人間生活の過去に根をおろし、しかも現在とも結びついて—が存在しており、それはときにはごく僅かな距離で技術環境と接していることも少なくないのである。この別の世界をフリードマンは自然環境とよんでいる。この自然環境においても、人間は *homo faber* (工作人) の意味においてまったく技術を知らない、あるいは用いないのではないのである。ただここでは、人間と自然の要素(地水火風など)は何の介在物もなく直接に接触しているのである。人間たとえば「指物師は長持ちをつく

るのにあたって自分で設計を考え、材木をきり、手で鉋をうごかし、穴をあけたり、のみを使ったりして製品をつくり、それに自ら塗装をして仕上げるのである。」¹⁵⁾ 彼は原材料ときりはなされることもないし、また製品は彼の意向によって処分されるのであるが、大切なことはこの場合における道具 (*outil*) が彼の手の延長であり、彼自身の意図にしたがって使用され、動かされていることである。つまり、道具は手の延長として、Mauss のいう¹⁶⁾ 人間の肉体の技術 *techniques du corps* であり、人間の技能、熟練の延長であることである。この自然的環境は、発生的にみると今日の技術文明の発達に先行する時代のものであるが、近代的都市の発達する以前の世界に属し、人間の技術が手の延長である手工業 *artisanat* の支配した時代のものである。つまり、自然的環境はその根底が本質的に農村的、手工業的であり、機械といっても人間の手動によるものしか利用されなかった世界なのである¹⁷⁾。この世界、この環境においては日常生活においていたるところリズムが支配し、大きな役割を演じていたのである¹⁸⁾。このリズムとは人間の生活のリズムであって、われわれの心臓の鼓動、呼吸の運動、つまりわれわれと環境との交換の函数なのであるが、さらに人間はこのほかに知的活動をもつのである¹⁹⁾といわれる。自然的環境はつねにこの自然のリズムの圧力の下にあったのである。

また、この自然環境下にある人間は時間についても、今日の人間とはまったく異った観念を有していた。つまり、自然環境にあっては、時の流れ、経過を印づける正確な基準はなく、その欠如に対して人びとは無関心であった。そうした無関心、緩慢、速度の感覚の如欠などは実は、日常生活において、以上指摘したように、根底にリズムが存在していることの外的な表現にほかならなかったのである²⁰⁾。この点の事例はフリードマンによると16世紀のヨーロッパにおいてみられるもので L.

15) 5) p. 44.

16) Marcel Mauss, *Sociologie et Anthropologie* 1968, Sixième Partie, Les techniques du corps p. 365—386参照。

17) 5) p. 47.

18) 5) p. 48.

19) 5) p. 48.

20) op. cit., p. 52.

フエーヴルによって指摘された「浮動的な時間、眠っている時間」²¹⁾はそれを証明している。実際、その当時までは本当の時計は稀にしかなく、しかもその時計もきわめて幼稚なものであり、また時計をもっていることを誇りとことができたのもごく小数の特権階級の人にすぎなかったのである。フエーヴルの次の文はこうした時間観念を的確に表現しているといえよう。「結局、農民社会の住民は、教会の鐘がなる時以外、正確な時刻を知ることがを必要としない生活を送っていたのであり、教会の時以外は、植物、鳥のさえずりや鳥の飛翔にたよっていたのである。」²²⁾

そればかりではなく、自然環境下にあった人々は、今のわれわれとは同じようには、自然をみていなかったのである。彼等の感覚や感情もまた環境の影響を強くうけていたのである。感情とか感性の表現は、たんに自然的偶然的刺激要因に対する単純な自動的な反応ではなく、生活条件や生活様式により条件づけられて、集団生活と密接に関係している。いわば、それらもその重要な一面において社会的事実なのである。²³⁾だから彼等の心性 *mentalité* は今日のわれわれのそれとも著しく異なるのである。²⁴⁾たとえば、今日では論理的思考は、科学にまったく縁のない人々によっても、支持されているが、自然環境においてはまだそうではなかった。実験的考え方の先駆者や観察者あるいは実験の大胆な創始者たちは出現してはいたが、いわゆる科学はまだ実現されていなかったのである。²⁵⁾そればかりでなく、合理的な考え方を主張した学者の心中にも、それと並んであるいは混在して、神秘的な心性が残存していたのである。²⁶⁾つまり、自然の創造力の無限性とか存在の現れ、形の多様性あるいは融通無礙性などに対する信仰が残っていたといわれる。それでそうした感覚的イメージの豊富さによって抽象的、演繹的思考のはたらきも麻痺させられていたのである。²⁷⁾

さらにこのほかに、自然環境はもっと微妙で、デリケートな特徴をもっている。そしてそれら特徴の一部は人間と彼をとりまく環境との関係、一定の文明における物的、精神的な生活の条件を説明することに役立っている。フリードマンをこの特徴の記述に移って、次のようにのべている。「自然環境は、まだ、人間を全く必要としないような機械や技術をもっていない。」それは「エネルギーを遠隔の地まで伝達する手段をしらないし、またその言葉、歌、命令、イメージを遠隔地に伝達する方法もしらない。自然環境は現実にもそこに居合わせなければならぬ。」つまり、自然環境は仕事のための原材料、道具、機械のそばにいないのではないのである」²⁸⁾。だから人間が自然に作用を及ぼすのにも人間自身がそこにいなければならない。このその場にいること *présence* が注目すべき特徴なのである。「自然環境においては、人間はそのあらゆる活動にあたって完全にその存在を投入しており、さらにまた事物や人間と密にまじり合っている」²⁹⁾ということが感じられるのである。人間は活動から自分の姿をけすことも、また代替物をおくこともできない。正しく活動する人間はそこに現存するのである。*l'acteur est présent*, だから人間が主体的に現存しない演劇も祭も遊びも考えることはできない。活動する人間はその唇、眼、顔をかがやかせて語り、その全身から感情を放出する。労働においても、人間の全存在がそこに投入されており、技術的能率をはたらかす運動と共存している。人間が用いる道具も手と原材料を媒介せしめているが、この道具も生産から人間を除去するのに役立つのではなく、製品の製作を可能ならしめることによって、生産を人間化するのに役立っている。

しかもこの製作において、製作者たる親方はそれをひとりで完成するが、そこに連続性、計画の実現、精密度の向上、全体的調和を導入するので

21) *op. cit.*, p. 53.

22) L. Febvre, *Le Problème de l'incroyance au 16^e siècle*, Paris, 1942, p. 428.

23) (5) p. 57.

24) (5) p. 58.

25) *op. cit.*, p. 58.

26) *op. cit.*, p. 59.

27) *op. cit.*, p. 59.

28) *op. cit.*, p. 61.

29) *op. cit.*, p. 62.

ある。そして人間の存在が完全に実現されているのはとくに医師のような職業においては特に顕著なのである³⁰⁾。つまり、自然環境における人間の活動はすべて *présence* 現存ということによって特徴づけられるのである³¹⁾。しかし、この特徴と結びついている特徴に共感 *sympathie* がある。共感は現存 *présence* にはつねに伴うものであるといえよう。「自然環境において、個人をとりまいて心的相互作用が頻繁に行われること、刺激や表象が流れのようにつづいていることは、人びとの間に、人間と自然の諸要素の間にたえず技術が介入しているときよりは、より多くの、より強度の高い共感の流れがあるものと解することを可能にする。」³²⁾ こうして人間の生存の条件と活動は自然環境の中では、こうした直接的了解、直覚の機能をよびさまし、それを維持することになる³³⁾。こうして *présence* は *sympathie* を伴うのである。従来ルイ・ヴェーバー Louis Weber などが、各種の人間集団においてみられるとした技術的悟性と直覚にもとづく、宗教的感情を創出源とする生の解釈の区別³⁴⁾ は、利用の術 *savoir-utiliser* と共感の術 *savoir-sympathiser* の区別を意味するもので、それは共感の存在を分析したものである。しかも中世の自然的環境においては共感は技術利用と共存していたのであり、両者は相互に排除し合うものではなかったのである。だから、この当時においては、技術は共感を危険に陥れることはなかったのである。³⁵⁾ 以上フリードマンのいう人間の生活にとって基本的に重要な意義をもつ、いくつかの自然環境の特徴をあげてきたが、そうした点についての研究が始まったのはごく最近のことである。本来文明の研究は本来、そうした人間の思考・感情の様式の発展をその中に含んでいなければならないのである。そして特に人間の歴史、とくに西欧の機械化以前の文明の歴史におけるこの自然環境の優越性をしっかりと頭にいれておくこと

が必要であることをフリードマンは強調するのである。ところで、自然環境の優越は *homo faber* を否定するのではなく、人間が食糧をとり、衣服をまとい、住居をつくり、移動したりするために行う努力が何等かの技術の漸進的発達を意味することはもちろん認められるのである。しかしそうした技術と18世紀末期以降出現した機械利用に基づく技術とは根本的に区別される³⁶⁾。ところで、この自然環境と技術環境の現在社会における位置づけはどうなるのであろうか。フリードマンはその点について明示的な言明は行なっていない。しかし、この二つの概念の意義はただ対比的にたとえばゲマインシャフトとゲゼルシャフトのように用いられているだけにあるのではなく、両者が調和的、均衡的關係において存在することが望ましいと、考えられている点にあるといえよう。だからフリードマンは、別の論文において³⁷⁾、技術環境は、その範囲が拡大するにつれて、昔からの人間の本能的行動を変化させてきたことを述べさらにそれにともなって、感じ方や考え方も変えてきていることを詳しく論じている。そしてとくにこの技術環境は「われわれが現存 *présence* を知覚する機会をより少なくさせる傾向にある。輸送技術の速力はわれわれの事物との知覚による接触の可能な限界をこえている。その上、余暇の技術が映画、話す機械、ラジオ、テレビジョンを通じて、個人の行為や対象の現存に代替物を導入していることも注意すべきである」³⁸⁾ とのべ、新しい環境が都市生活を営む人間の日常生活から現存を奪い去ることによって、人間の感受性と知覚の変化を強化していることを力説する。しかもこうした変化の結果、新しい環境に対する人間の適応を著しく困難にさせていることが指摘されるのである。それは新しい環境が人間に対して過剰なまでの異質的な刺激物をおしつけていたり、新しい環境に浸透している技術のたえまない発展がま

30) (5) p. 63.

31) *ibid.*

32) (5) p. 65.

33) *ibid.*34) Louis Weber, *Civilization, le mot, l'idée*, pp. 131 et suiv. cité par Friedmann, (5) p. 66.

35) (5) p. 66,

36) 5, p. 67—68 脚注。

37) *Le milieu technique : nouveaux modes de sentir et de penser* (chapitre II de (5)) p. 40—69.38) *ibid.* p. 63.

まったく制御も指導も調整もないままに拡散していることによるものなのである。こうした状況にある技術環境は無秩序の世界に人間をおとし入れるものであり、それが人間のうちに混乱した運動、感覚、心理的な反応を誘発してくるのである。それ故に、この技術環境の過剰な支配を克服するために、自然環境との均衡回復が今日の緊急な課題となってくるのである。しかし、技術環境のもつ支配力はきわめて強大であり、それは生活水準の著しい向上という人間にとっての願望を実現させるという大きい魅力をもたらし続けているが故によりこの課題は一層重大なのである。この重大な課題に対する解決はフリードマンの「力と英知」*Puissance et Sagesse* の中にも与えられているが、それにふれる前に、工業生産における技術環境の問題としての人間の労働の問題に立ち戻ることしよう。

V

フリードマンは著作(3)、(5)、(7)において特に工業機械化の著しい進展下における労働問題としてそこにおける人間問題 *problèmes humains* を詳しく扱っている。それは(1)テラー・システムの導入以来ヨーロッパ、アメリカで行なわれた産業労働についての各種の研究において人間問題がどのように捉えられてきたか、という点についての探求と、(2)もう一つは機械化が著しく進み、労働の細分化やオートメーション化が進んでいる現代における問題の分析と(3)それに伴う余暇に関連問題についての考察である。

(1)はフリードマンの(3)において展開されている。フリードマンはまずテラー・システムの批判から考察をはじめている。テラー・システムは周知のように、労働の能率を高めるため、労働についての作業と時間分析からはじめ、作業についてのただ一つの最上の仕方 *one best way* の発見をめざしたのである。しかし、その後の研究者たちによると、テラーの主張するような要素的動作に要する時間測定法はテラー派の人たちが考えるほど合理的ではないし、とくに作業全体に要する時間をみるために、作業を要素に分解しその

各々に対応する時間だけを測定してそれらを合計するだけでは合理的ではない。速い機械化された仕事において、要素的作業間の時間の測定は容易につかめるものではない。もしむりに要素作業に要する時間の合計だけで作業に要する時間を定めると、労働条件は心理的に、生理的に労働者にとってきわめて苛酷なものになる可能性が大きく、すでに J.M. Lahy が1916年にテラーの労働組織は「たえず過剰労働を要求」することになると報じている点をフリードマンは援用している³⁹⁾。また仕事は一連の作業からなるが、一連のまとまった運動には個人差があるから、すべての人に一律にある仕方だけが最上であるとはいえない。それに速さだけが労働の能率の唯一の基準ではなく、それよりも労働者が仕事を行なうしやすさ *l'aisance* の方が基準としてまざっている。またテラーの時間作業分析は人間のエネルギーに関して科学的資料をもっていないだけでなく、報酬体系も過労に対する手当支給的な面をもっている。一部の人々はテラー・システムの狙う能率増進は、だから、合理化の線に沿っているよりはむしろ労働強化の線に沿うたものであるとみている。

だから Atzler などは、「労働過程は人間的意欲の個性に適合するように定められるべきである」⁴⁰⁾と主張している。つまり、労働作業の分析には技術者ではなく、本来、生理学者の行なうべきことなのである。だからテラー・システムには生理学的な基礎づけがないという欠点をもっている⁴¹⁾、さらに労働する人間の心理的作用が全く無視されている。そうした点から、フリードマンはテラー・システムは工学の応用としてはすぐれているかもしれない、その意味で装置と労働力の能率向上のためのすぐれた体系ではあるが、科学であるとみることとは誤りであると断定する。そして、とくに一律的な時間測定、人間労働を機械装置の運動と同一視したこと、人間という有機体とその固有の要求の、肉体的および精神的なほたらきを無視したこと、過労を招致する報酬体系、職業教育の欠如、経験的な一般論をいきなり法則としていることなどの誤謬を指摘するのである。結局、

39) (3) p. 46.

40) (3) p. 48.

41) (3) p. 51—53.

テーラーの問題点は生産に従事する人間のもつ統一性 *unirté* を正しく認めなかったことにあり、その点は正しく多くのテーラー批判者に共通にみられる点であるというのである。

テーラー・システムの批判とともに人間としての労働者の有機的・心理的側面を重視する研究がはじまってきた。それらは疲労、労働時間の長さ、温度、湿度、通風、照明、騒音などの労働環境の諸問題、機械の人間への適応、労働災害などについて科学的研究を旨としたものであるが、それらが何よりも、従来のテーラー理論と異なる点は、仕事の速度や能率を唯一の基準とする技術主義の視点に掟われない立場をとったことである。すなわち、これらの研究者は、労働者たちの有機的・心理的構成を見おとすことなく、彼等の肉体的・精神的幸福が基本的要求であることを正しく理解してきたのである。だから、これらの研究者は労働者の人格が不可分で、深い内的統一性をもっていることを認めていたのである。とくに、産業心理学の多くの研究はその面で多くの貢献をもたらしたのである。それは機械工場における仕事が労働者に及ぼす生理的、心理的影響について深い関心をもって、種々の資料を提供したのである。そしてそうした資料は労働者における人間的要因の重要性を明らかにすることに役立ったのである。しかしながら、フリードマンは、そうした研究が人間的要因を無視すべきではないことを明らかにしたが、それは、企業能率を全く考慮しなかったのではなく、同時にこの能率と人間的要因との調和をはかることを目的としていたのであるという。だから生産面における人間的要因の指摘はまた真の人間的立場の重要性を全面的に強調したものではなかったのである。そこに、この人間的要因強調の研究の限界があるとフリードマンは主張する。たとえば、仕事の単調さについての産業心理学の研究は、従来機械化された労働の単調さについて抱かれてきた観念が決して明確なものではないことを明らかにした。また、さらに一部の研究者は反復されるが故にそれ自体として単調だという仕事はなく作業員個人の主観によって異るとみている⁴²⁾。もちろん単

調さの意識ということも単調さと無関係ではないであろうが、それを意識に還元し、相対化してしまうことは、単調さをあらゆる仕事に同じように認めることと同じく独断論に陥るものとなるのである。そうした考えは単調さの客観的側面を正しく見ることを放棄するのと同じことである。こうした観点から、フリードマンは単調労働に対して反感をもつ労働者は比較的知能水準が高いことが多く、低い知能水準の労働者には科学的管理法がとっている仕事の細かい分割を喜び、また責任ある仕事につくよりは機械的な簡単な仕事を好んでいるという見解を批判し⁴³⁾ さらにまた、こうした単純作業のひきおこす人間の問題に対する有効な対策としては仕事の完全な自動化のほかには方法はないとみる見方は、半自動的な単純労働の人間化という課題に対する断念であると論じている⁴⁴⁾。

ところでこのほか機械化の労働に及ぼす影響の重要な問題として、仕事の技能、熟練 *habileté professionnelle* の問題がある。機械化が著しく進み、科学的管理法の手法が産業の各部門に浸透してくると、いわゆる大規模工場だけでなく、中小規模の工場においても、熟練労働者や高い技能を必要とする仕事が減少してくることは、一般的に見られる傾向であり、そうしたことが技能、熟練の退化といわれる現象となっている。それは労働者が仕事に習熟し、それにより何ものかを習得するという仕事の喜びを失わしめるだけではなく、同時に労働者が熟練、技能の度合いを高めることによって、半熟練労働者から熟練労働へと昇進し、賃金だけでなく、社会的地位も向上させる機会をも奪い去ってしまうことになる。この技能・熟練の喪失は労働組合にも大きな問題を投げたのであるが、この喪失の傾向の発展はしかし必ずしも簡単な動きではないことも事実である。たとえば、生産の合理化はたえず質の向上を必要とするから、材料に対する不断の研究を要求するし、一部機具の精密度をたえず向上させることになる。それは当然複雑で、多能的な新しい機械の利用、自動的装置の導入を要求する。そこでこうした機械や装置の運転が円滑にいくため、保全、修理等

42) (3) p. 146—147.

43) (3) p. 149.

44) (3) p. 150—151.

も十分に注意されなければならない。その結果、こうした部門に技能水準の高い要員が必要となるから、そこでは技能、熟練労働者を減少せしめることはないという面も生じてくる。つまり技能熟練は従来とは異った面に推移してきていると見ることもできるのである。そうした部門ではだから従来よりは高度の知性をもつ労働者が要求されることも起こっているのである。いわゆる「新しい手工業」*nouvel artisanat* の必要がそこに生じているのである。そうした事例は多くの産業部門において何程かの程度生じているのである。しかし、機械が技能の向上に対して役立つと考えられる面は労働の全部門についてみると必ずしも多くはない。統計的にみても、1930年以前においてフォード自動車会社における労働者の熟練度別構成をみると⁴⁵⁾、一月以上の訓練、教育を必要とする労働者の比率は15%程度である。さらに戦後の推移をみても、たとえばアメリカでの統計をみると、単純労働者は機械化の発展によって減少はしているものの、半熟練労働者の比率は全般にみると減少の傾向にあるとはいえない。むしろ機械技術の進歩の度合からみると、半熟練労働者はむしろ増大しているとさえみることができ⁴⁶⁾。同じことはフランスについてもみることができるのである⁴⁷⁾、ただ、フランスの場合は、フリードマンものべているように、統計上熟練労働者 *ouvriers professionnels* とされているもののなかにも、企業と組合との交渉によって、技術革新によって労働者の待遇を低下させないために、労働者の熟練度の再分類にあたって、実質的には半熟練であるものを、熟練として判定しているものが含まれている、という事実も無視するわけにはいかないのである。こうした事情が統計の数字にどのくらい反映しているかは明確にできないことではあるが、フランスにおいても統計数字以上に半熟練労働者が存在することは事実である。そうした事情を考えると技能・熟練の一部門における推移は事実ではあるが、全体的にみてその低下、減退は否定できない事実である。そうしてみると、こうした事態に対してどのような教育訓練が考えられるべき

かが問題なのである。人間的要因を指摘した研究においてはそうした問題についての考察はなされていないのである。

ところで、アメリカのホーソン工場での研究によって発見されて以来多くの論議をまきおこした「人間関係論」はどのような意味をもつのであろうか。人間関係の重要性が明らかにされたのは、半熟練労働者についてなのである。それは科学的管理法に対するアンチ・テーゼとして登場したのであるがノこの人間関係論は結局技術主義の合理化に対する批判に到達したのである。ところでこれに対するフリードマンの見解は次のようである

ホーソン工場実験の調査の背後にある考え方というカイデオロギーを明らかにしなければならないが、それは要約すると以下ようになる。「未開社会における共同生活に代って、経済活動が社会的機能として認められる社会においては行動についての非論理的 (non-logique) な綱領が支配する。それは手工業やマニファクチュア時代の社会にまでつづいている。しかし産業革命はこうした枠組を打破する。そして行動を支配するのは非合理的な綱領から合理的、論理的なものとなる。ところで工場内には三つの論理、費用の論理、能率の論理と感情の論理がはたらいているのがみられる。ところで感情の論理は企業におけるインフォーマルな組織の背後にはたらいているが、技術者は労働者がつねに論理的あるいは経済的考慮に基づいてのみ行動するのではないという事実を見のがしている。労働者は経済的な組織に真に統合されているのではなく、つねに同僚たちと有機的な社会関係にあることを望んでいる。大規模工場においてみられる心理的な葛藤や低い士気は合理化の論理的体系を一方的に全般に適用することから生ずる感情に根をもつ社会構造の分解の過程と結びついている。産業における科学的顧問の仕事は、労働者の行動の非論理的要素や労働者を真に結集している自発的組織を無視しつつづけている、管理方式の欠点を明らかにすることなのである。だから能率の論理がひきおこす拘束や葛藤をできるだけ回避し人間的要因を理解に基づく社会構造

45) (3) p. 197.

46) Travail en miettes, (appendices) p. 326—327.

47) 細分化された労働 (拙訳)。p. 249—253.

を維持することが産業における重要な人間関係管理方式の実践的課題となるのである。」こうした方式に基づいて、生産や従業員の具体的条件に適合した方法によって、「団体精神」を発達させる試みがなされてきたのである。しかしこうした人間関係論に対してフリードマンは以下のように批判する。⁴⁸⁾

I. ホーソン工場の調査員たちは企業の責任者と協力して注意深くそこにある統一的、求心的な潮流を観察したが、労働者の心性において重要な意味をもつ、反対の分化的・遠心的潮流については十分に分析してはいない。彼等調査者たちは企業に対して無意識の中に、科学的研究者と企業顧問としての二重の役割によって心理的に制約されたのではないかという疑問がおこる。

II. 彼等は工場内において、相対立する小規模の分派(クリーク)の存在を認め、それらの群間における敵対心、嫉妬心等のはたらきを認め、それらに対して企業だけに限って認められる因果律のはたらきは認めているが、企業外に対する作用は全く認めていない。それは論理的ではない。

III. 企業における自発的組織、従業員間の人間的相互関係が彼等に生産制限という自衛的行動をとらしめるのに重要な役割をしていることは指摘がなされているが、それは特定の企業だけにみられる現象というよりは、企業をこえて見られる社会経済的事実なのであるから、労働者がおかれている全体社会における社会的条件ときりはなしては正しく理解できない。工場を一つの社会構造とみることは社会学的考察として必要ではあるが、企業は絶対的なものではないし、真空の中にあるのではないことも正しく認められなければならない。労働者も企業という集合体の成員であるだけでなく、全体社会の一員として他の集団にも所属するからである。

IV. したがって、この調査は社会心理学の基礎に立って、意識的に社会的現実の一面を除外して労働者の社会構造(企業の)に対する不信、敵対反抗などの反応を非合理的とみ、そのように説明はしているが、そうした反応が健全なもの、社会的条件に適応したものをもちつことは看過されている。

V. この調査のリーダーは外的社会条件が企業内の人間関係には何の影響も及ぼさないとし、こうした研究は他の国においても同じ意味をもちうるという。しかし、彼等が批判する「能率の論理」しか頭になく技術者も多くの場合、自ら選んでそうしているのではなく、20世紀のアメリカ社会において生活するため能率極大化を追求しなければならない立場におかれていることを見ていない。

VI. こうして、人間関係論も心理的観点からみた人間的要因を社会的な本質をもつ決定論に従属させているにすぎず、真に人間的視点を労働の中にもちこむことにはなっていないのであるといえるのである。だから、人間関係論は、最上の場合労働者を、組織、技術、福利厚生事業の集合体とみられた企業に統合させることには成功したとはいえるが、法的にも威信的にも平等な人間が共同の目的と感情によって結びつけられている人間の結合として見るにはいたっていないのである。

こうしたフリードマンの人間関係論批判からも明白に看取されるように、フリードマンは労働の社会学的考察において、特に人間としての労働者の主体性回復を旨とすることに貢献する方途を見出すことを重点にしているのである。そうした点から、今日の産業労働において、もっとも大きな問題なのは、細分化された労働 *travail en miettes* に従事する半熟練労働者たちの問題である。彼は(7)において、この問題のを考察の中心として、さらに余暇問題の考察を加えて興味深い指摘と一種の文明批判を試みている。この点を次節において概観していくことにする。

VI

統計的に見ると、労働者の中いわゆる半熟練労働者の数が機械化の進展によっても減少するどころか、むしろ増大の傾向にあることをフリードマンが指摘したことは上述のとおりである。テーラーが科学的管理法を提唱した時期と異なり、今日では分業の細分化はあらゆる人間の労働の面に拡大し、従来のように肉体的労務だけでなく、非肉体的労務、事務所や商店、さらには事務所にまで拡

大してきており、それらの職務の細分化、自動化も著しく普遍大してきている。この反面、労働者の生活水準は、機械化の進展以来、一般に先進国においては著しく向上してきたし、また労働時間も最近著しく短縮されてきている。そればかりでなく、作業環境も一般に著しく改善されてきている。また、労働者の学歴も漸次向上してきているが、職務それ自体は、その要求する肉体労働は非常に楽なものとなっているにも拘らず、内容的には単純な反復的で、部分的なものが多くなってきている。しかも、上述したように、そうした労働につくためには余り訓練を必要としないでもよいものが多い。そうした労働に従事する半熟練労働者の群は、全般的な技能、水準の向上にもかかわらず、減少する傾向は見えていない。そうした半熟練労働者の従事する細分化された労働のもつ特徴として次のような点があげられる⁴⁹⁾。(1)見習訓練の期間の著しい短縮。多くは1週間ときには1日か2日程度で職務遂行に必要なことは習得されることが多くなっている。(2)その結果生ずる職務の「資格としての技能も喪失されてくる」。(3)原材料に対する知識の衰退。労働者は細分化された労働において加工される材料について知識をもつことが不要となっていることが少なくない。(4)技能として要求されることは、ただ職務を機械や装置のペースに合わせて遂行し、それに慣れることだけとなってくる。(5)要するに細分化された職務を遂行するには、思考とか判断はまったく不要となり、ただ命令されたとおりに、機械的に遂行することだけが大事なこととなってくる。思考と遂行の分離は科学的管理法が導入した原則であるが、それが決定的な段階にまで進んでいるのが、細分化された職務である。それは正しく労働から人間性を完全に奪うことになるものなのである。そればかりではなく、こうした細分化された労働はそれに従業する労働者の能率をかならずしも高める結果を生じていないという現象がおこっている。フリードマンはそのような細分化された労働に従事する半熟練労働者の作業状況を分析し、アダム・スミス以来唱導されてきた分業の利益が現在ではむしろ

実現されない点にまで到達しているのではないか、という根本的疑問を出してくる。とともに、細分化された労働の弊害を救おうとして試みられた、各工場における職務のローテーション、職務拡大などの多くの事例をあげて、その利点を検討している⁵⁰⁾。たしかに、これらの試みはある程度の効果をあげており、細分化された労働に従事する人々の心理にも好影響をおよぼしていることは相当数あげられた事例によっても明白である。しかしながらローテーションや職務拡大によって、細分化された労働のもたらす諸々の難点は解決されるにいたっているであろうか。また将来それは解決されることが見える見透しは立っているであろうか。フリードマンのこれに対する回答は否である。細分化された労働のもたらす非人間的な結果を除去するには、分業に対する考え方を改めることが必要であり、仕事に対する全体的理解を体験を通じて労働者に与えること、労働者に対する教育についてもただ職務に直接必要な知識、技能を与えるだけにとどまらず、広い人間的文化的教養を与えることも考えられなければならないことが力説されるのである。

ただ現在の時点においては、細分化された労働によって被害をうけている労働者に対して、他の適切な方法を利用できない場合には、余暇の利用—労働時間の短縮によって可能となってくる—によって補いを与えることが当面の解決等であるといえるが、余暇は細分化された労働、仕事自体に対して全く興味や関心をもちえない人びとに対して最も最上の、また唯一の解決策ではないのである。というのは、仕事に真に自分の全体を投入できない人びとはまた余暇をも真に余暇として容受できないことが多いからである⁵¹⁾。そうした点から、仕事の人間化、分業の根本的修正についてもっと考慮が払われなければならないのである。この余暇の点からもう一つ大きな問題になるのは、労働時間の短縮によって労働者に与えられている解放された時間 *temps libéré* に、技術的環境の一要素であるテレビジョンが著しく浸透してきていることである。解放された時間を多くの人は

49) 細分化された労働（拙訳）第一章。

50) 細分化された労働，第二，第三，第四章。

51) 'Travail et loisir, aujourd'hui et demain' in (5) p. 354—368.

自由な時間—これこそが真の余暇であるが一であると考えているが、実際にはそうではない。真に自主的に人間の向上に役立つように使われない時間はときには麻醉剤利用にしか用いられないことにもなるし、また今日著しく発達して人びとの余暇にどこにでも侵入してくるテレビジョンなどのマス・メディアもそうした役割しか果たさないこともおこってくる。その意味で、大衆文化の向上とマス・メディアの内容の問題は今後人間に大きな研究課題を提供してくるのである。⁵²⁾

技術の力がますます強大となってきた現在、人間の英知も各種の技術について人格の向上に役立つよう正しい知識と正しい利用法を身につけなければならない。ただそうしたことが実現されるような社会とはどんな社会なのであろうか。フリードマンはそうした社会を共同体的社会主義にもとづくものと考えているが、その構想の詳細はまだ明白にされていない⁵³⁾。労働の人間化を実現することについて、最近 I. L. O. も多大の関心を示している。そうした方向において労働問題をとらえたフリードマンの洞察に敬意を表したいと考える。同時に産業労働問題研究者にとってはこの示唆された方向に沿って努力を続けることが何よりの急務であるといえよう。

参 考 文 献

フリードマンの著作（単行本としなかった）のみ（なおフリードマンの業績全体については本紀要第28号に詳細なものが掲載されている。）

- 1) *Problèmes du machinisme en U.R.S.S. et dans les pays capitalistes* ; Paris, édition sociales

internationales, 1934.

- 2) *La Crise du Progrès* ; Paris, Gallimard, 1936.
- 3) *Problèmes humains du machinisme industriel* ; Paris, Gallimard, 1946 (nouvelle édition, 1961).
- 4) *De la Sainte Russie à l' U. R. S. S.* ; Paris, Gallimard, 1938.
- 5) *Où va le travail humain ?* ; Paris, Gallimard, 1950. (nouvelle édition, 1963).
- 6) *Villes et Campagnes : Civilization urbaine et Civilization rurale en France* ; recueil publié sous la direction et avec une introduction de Georges Friedmann, Paris, A. Colin, 1953, (nouvelle édition 1971).
- 7) *Le travail en miettes* ; Paris, Gallimard, 1956, (nouvelle édition, 1964).
- 8) *Problèmes d'Amérique latine (I)* ; Paris, Gallimard, 1959.
- 9) *Problèmes d'Amérique latine (II), Signal d'une troisième voie. ?* ; Paris, Gallimard, 1961.
- 10) *Traité de Sociologie du Travail*, en collaboration avec Pierre Naville et avec le concours de Jean-René Tréanton, Paris, A. Colin, 2 vol., 1961 et 1962.
- 11) *Problèmes de Sociologie industrielle*, 5e Section de "*Traité de Sociologie* publié sous la direction de G. Gurvitch. 1960.
 - 1) *Sociologie des techniques de production et du travail*, (avec J. Daniel Reynaud.)
 - 2) *Psycho-sociologie de l'entreprise* (avec J. Daniel Reynaud).
 - 3) *Sociologie du syndicalisme, de l'auto-gestion. ouvrière. et des conflits du travail* (avec J. René Tréanton).
 - 4) *Vie de travail et vie hors travail-Industrie et société* (avec J. René Tréanton).
- 12) *Fin du peuple juif ?* ; Paris, Gallimard, 1965.
- 13) *Sept études sur l'homme et la technique* ; Paris Gonthier, 1966.
- 14) *La Puissance et la Sagesse* ; Paris, Gallimard, 1970.

52) 'Enseignement et culture de masse', *Communications*, 1 (1961) P. 13—15.

53) フリードマンはこの問題に関して1974年3月21日～23日のル・モンド Le Monde 紙上で、自主管理 Autogestion の問題を論じていた。筆者はその一部を見ただけなので、それ以後のことについてフリードマン教授に問い合わせたところ近く全貌を刊行するとの答えをえた。しかし、その書はまだ刊行されていない。